昭和39年度平城宮跡発掘調査概要

平城宮跡発掘調査部

昭和39年度における平城宮跡の発掘調査は、調査部の拡充にともなつて大幅に進展し、調査回数は16次から23次にいたる8回、発掘面積は361アール（3.61ヘクタール）に達した。以下にその概要をのべるが、昭和38年度末におこなつた第14次調査の成果のうち、昨年度の年報に収録できなかつたものをもあわせて報告することにしたい。

本年度は宮域の買収ならびに国道24号線バイパスの建設計画と関連して、宮城の四至を明確にする必要にせまられたので、宮域の東西南北の各面につき、宮城門または大垣築地を含む区域を1～2個所ずつ選定して発掘をおこなつた。また別に、昭和34年以来継続的に調査をおこなつてきた通称一条通り北側の地域においても、これまでの発掘の空隙をうずめてこの方面における調査に一段落をつけるため、2個所にわかれて発掘をおこなつた。

個々の調査の調査回次・地区名・期間・面積については第1表を参照されたい。

第14次調査（続）　宮城西南隅

38年度年報に収録できなかつた第14次調査後半の成果として、南面の外堀と弥生式時代の集落跡について報告する。

＜南面外堀＞

第14次調査の際、宮城南面大垣の外側は史跡指定地外にあるため全面発掘をおこなわなかつたが、この部分に平安宮と同様な外堀の存在が予想されたので、小規模なトレンチを2個所に穿つて堀の存否を検討した。その結果築地から幅約10.7mの塀地をへだてたところに外堀の北縁を検出し、堀内から判読できない木簡と曲物容器その他の木製品を発見したが、トレンチが小規模であつたため堀の幅と深さは確認できなかつた。

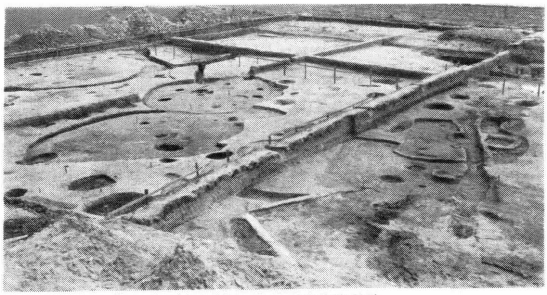
＜弥生式時代の集落跡＞

昨年度の年報で報告した奈良時代遺構の下層から、弥生

発掘回次	調査地区		調査期間 昭和年月日	発掘面積
14	西南隅	6ADH, F.I.J.K.L	38. 12. 7 — 39. 3. 31	57 a
16	朱雀門	6ABY, D.E.F.G	39. 2. 10 — 39. 10. 24	35
17	朱雀門内方	6ABX, F.H.I	〃 〃	57
18	西面築地	6ADE, P　6ADF, J.K	39. 5. 4 — 39. 6. 13	25
19	内裏東外郭	6AAC, M	39. 5. 4 — 39. 8. 25	9
20	内裏北外郭	6AAO, F.G.M	39. 7. 20 — 39. 11. 11	34
21	東面北門	6AAC, B.D.H.I.N	39. 11. 16 — 40. 3. 10	63
22北	東一坊大路	6AAC, P.Q.R.S.T.U.V	39. 11. 30 — 40. 5. 15	31
22南	東面中門と東一坊大路	6AAE, C.L.R　6AAF, A.B.J.K.N.O.P	40. 2. 4 — 40. 7. 3	43
23	北面築地	6ABA, N　6ABN, B	39. 10. 3 — 39. 11. 24	7

第1表　昭和39年度発掘調査状況

式時代後期の大規模な集落跡を発見した。もつとも集落の範囲は発掘区域の境界をこえて、四方の未発掘区域に及んでいるので、全貌の究明は今後の調査にまたなければならない。今回の調査で検出した遺構は、住居跡20個所、埋葬施設2個所を含む多数の土壙と数条の溝である。遺物は多量の弥生式土器と炭化米のほかに少量の石器と木製品を採集した。住居跡は形状から次の三つに分類できる。



第1図　第14次調査弥生式時代集落跡

A、方形の竪穴住居　7個所

比較的小型で、いずれも内部に炉がある。SB1477・1540の2個は竪穴の内周にそつて浅い溝をめぐらしているが、他のものはこれを欠いている。柱穴の明瞭なものは認められなかつた。SB1505では住居の上部構造が焼け落ちたらしく炭化材が床面に折り重つて遺存し、その一部には棰と推定できる遺材が、放射状にならんでいる状況が認められた。

B、円形の竪穴住居　2個所

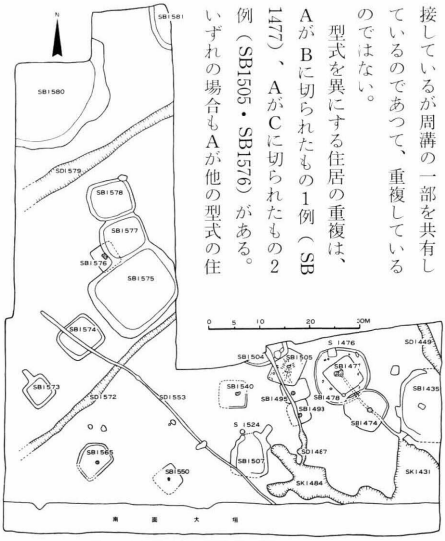
いずれも中央に炉を設け、竪穴の内周にそつて浅い溝をめぐらしている。SB1478ではこの溝の内側に7個の明瞭な柱穴があつた。

C、周囲に溝をめぐらした平地住居　11個所

方形またはそれに近い平面を持つている。一辺6m前後のものが多いが、なかには大型のものがあり、最大のSB1575は一辺が12.3mである。周溝は幅1.8～0.4m、深さ20～50cmで、溝で囲まれた内部は旧地表が削平されたためであろうか、SB1565以外は炉・柱穴が全く認められず、土器類もほとんど残つていなかつた。

住居跡の重複は各所に見られた。ただし、SB1575とSB1577は、近接しているが周溝の一部を共有しているのであつて、重複しているのではない。

型式を異にする住居の重複は、AがBに切られたもの1例（SB1477）、AがCに切られたもの2例（SB1505・SB1576）がある。いずれの場合もAが他の型式の住



第2図　第14次調査下層遺構実測図

居で切られているから、Aが最も古い型式であると考えてよかろう。BとCが重複した例はないが、Cの周溝から出る土器が今回出土した土器全体のなかで、やゝ新しい様相を示しているので、Cが後出の型式である可能性が大きい。

各所に散在する土壙のうち2個所は、内部に大型の壺棺を収めているので、明らかに埋葬施設である。その一つの SX1476は住居跡 SB1478を切つてつくられている。SK1431とそれにつながる SK1484は南方の未発掘地域にのびる大きなもので、人工の土壙か自然の凹みかは明らかでないが、内部の堆積土から土器のほか、一斗に達する炭化米と、梯子その他の木製品の断片を発見した。

出土品の大半を占める弥生式土器は、大部分が発掘区域の西部を斜に横切る2条の大きな溝と土壙 SK1431から出土した。器形は壺、長頸壺、甕、鉢、台付鉢、片口鉢、手焙形土器、甑、片口壺、高坏等の各種にわたり、様式は畿内第五様式に属する。

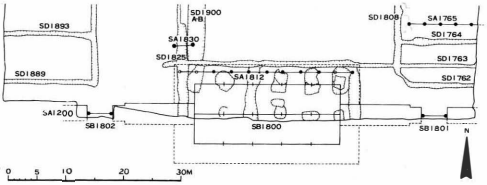
第16・17次調査　朱雀門付近

宮城南面の中央にある朱雀門と、その内方に接する地区を発掘し、朱雀門、東西脇門、南面大垣築地のほか、柵2条、掘立柱列2条、溝15条を検出した。

朱雀門 SB1800は、南半部が道路と池堤の下にあるため、北半部だけを発掘した。門の基壇はかなりの程度まで後世の改変を受けていたが、なお掘込みの地下地固めと、門の棟通りおよび北側柱通りの礎石下根固め石を検出することができた。推定基壇の大きさは東西約32m南北推定約17m、門の平面は桁行5間（約25.3m）梁行2間（約10m）で、各柱間は約5mの等間である。

第15次調査で発掘した玉手門の遺構に較べると、基壇の正面幅が等しいにもかゝわらず、奥行が長いのは、玉手門が単層、朱雀門が重層であつたことを示すものと考えられる。なお、朱雀門基壇上の北縁には、門廃絶後に通路を閉鎖するような形で設けた角柱の柵列 SA1812があつた。

朱雀門にとりつく南面大垣築地 SA1200は、北半を検出しただけであるが、本体の基底部幅は約2.7mで、北側に幅3.5mの犬走りと、幅50cmの側溝SD1762・SD1889を設けていることがわかつた。この側溝は東西とも朱雀門の手前で北へ折れ曲り、門まで達しない。



第3図　朱雀門遺構実測図

朱雀門の南北中軸線から約24mはなれた対称の位置には、築地にあけられた東西二つの脇門 SB1201・1202がある。どちらも築地本体の中心線上に立てた2本の掘立柱（柱間約4.3m）からなる簡単なものである。東脇門では掘立柱の北に接してすえられた凝灰岩切石が残つており、西脇門では同様の位置に玉石が敷きならべてあつた。いずれも扉取り付けに関係した施設と考えられる。

以上のべた朱雀門および築地の周辺からは多量の瓦が出土したが、その軒瓦の90%までは藤原宮出土品とおなじ文様のものである。

東脇門の北約16mのところには、東西にならぶ掘立柱柵 SA1765 とその南にそう溝がある。これと対応する西脇門の北方でも、同様な溝を検出したが、柵は存在しない。

朱雀門の内方は大きな広場になつていて、これまで応天門を想定していた位置にも、建物の痕跡は全く見当らなかつた。この広場を南北につらぬいて、朱雀門から宮城の奥に通じる道路があつたらしく、朱雀門の内側から、幅約23mのバラス敷きが北に走つているが、発掘区域の北部では後世に削平されている。

このバラス敷きの東西両側には、各一条の溝が南北に走つている。東の溝 SD1860は、朱雀門の手前38mのところで一たん東に折れたのち更に南に折れて、最終的には、大垣築地の側溝 SD1762に接続する。

西の溝 SD1900は、二つの溝が上下に重つており、上層の SD1900Bは門の手前で東の溝と対称に近い形で折れ曲り、築地の側溝に接続する。下層の SD1900A はそのまま南に直進して、朱雀門の基壇によつて断ち切られている。したがつてこの SD1900A は、朱雀門造営以前の溝である。

この SD1900A には、朱雀門北方35mのところに、杭と小枝を用いたせきが設けられており、せきの上流にあつた溝底の凹みからは、「過所」を含む9点の木簡のほか、曲物容器・糸巻等の木製品や土器を発見した。

第18次調査　西面大垣内側

宮城西面の中門と南門の中間において、西面大垣の内側にそう細長い区域を発掘した。西面の大垣築地 SA1600はほとんど現在の県道と重なり合つているため、道路敷からはずれた東側犬走り基礎地固めの東縁を検出するだけにとどめた。

大垣築地の内側には、秋篠川水系の旧河道が北から南にのびており宮城造営の際にこれを埋立てていることがわかつた。しかしその埋立ては、はなはだ不完全であつて、旧河道は宮城造営後も幅20～25m、深さ1.1m前後の南北につらなる凹みとして、宮城内にその名残りをとどめていたようである。

この凹みを横切つて、東西掘立柱柵 SA1970がつくられている。凹みの最も深い個所には、柵列の柱間の一つをつらぬいて、柵と直交する2条の杭列 SX1975が残つていた。この杭列は90cmをへだてて併列し、両列の上端が八字形に交叉するよう斜に打ちこんである。おそらくこの上に土盛りをおこない、暗渠として使用したと考えられる。その北方12mのところにも、同様な施設 SX1982が検出された。

右の SX1982のすぐ東には、数十本の杭を方形にめぐらした意味不明の遺構があり、さらにその区画内には円形の土壙 SK1979があつた。土壙内の堆積土中からは、金属利器のための木柄、鞴口、鉱滓とともに、「…□打合釘□」と記した木簡が出ているので、付近に鍛冶関係の工房があつたらしいことが推測される。

第20次調査　第2次内裏北外郭

通称一条通りの北側では、昭和34年以来継続的に調査をおこなつてきたが、今回、西・東の二個所にわかれて発掘した第20次調査をもつて、第2次内裏内郭北側での調査に一応の終止符をうつた。

〈西地区〉

第11次調査区域と、第13次調査の西地域の間にはさまれた狭い地区である。南北柵列 SA630は、すでに第11次調査の際北端の5間を検出していたが、今回の調査により、計23間以上の長い柵であつて、内裏の北部外郭を東西にわかつ機能を持つていることがわかつた。この区割りが、平安宮内裏の北方にある蘭林坊・桂芳坊の区割りに似ていることは、この区域の性格を考える上に一つの手がかりとなる。

このほか調査区域内では掘立柱建物3棟、井戸1を新たに発見し、また以前の調査でその一部を発掘していた掘立柱建物2棟の未確認部分を検出した。それらは第2表に示す如く、すくなくとも3期にわけられる。

第2表　第20次調査発見遺構

地区	時期	遺構	柱間	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	
			間	m	m	
西地区	A	SB 585	1 3×2	2.95	3.00	南廂
		SA 630	23以上	2.90	—	
	B	SB 1015	8×3	3.00	3.00	
		SB 2121	5×3	2.25	2.10	
		SB 2190	3×1	3.00	3.00	
	C?	SB 2155	3×2	1.95	2.10	
東地区	A	SK 2102				紀年木簡出土
	B	SB 2131	5×2	2.70	3.00	
		SC 060				内裏築地回廊
		SA 486	10以上			
		SA 488				
		SK 2101				紀年木簡出土
	C	SB 1135	7×3	2.80	2.80	西南廂
		SE 2128				方1.2m
	D	SB 2170	3×2	2.25	2.10	
		SB 2140	3×2	2.40	2.10	

＜東地区＞

第13次調査の東西両地区にはさまれた地区である。

発掘区域の南縁に、内裏内郭築地回廊 SC060の北側柱列と、付属の凝灰岩雨落溝を検出し、さらにその北にそつて東西柱列 SA480と、内裏北部外郭をとりまく築地 SC488を検出した。これらはいずれも既往の調査で存在を知られていた遺構の延長部である。SC060の雨落溝からは、三彩の鬼瓦破片が出土している。

内裏北部外郭にあたる部分には建物が少なく、しかも北にかたよつている。今回新たに検出した建物は4棟にすぎなかつた。

発見した遺構は第2表に示す如く、すくなくとも4期以上にわかれる。第13次調査の結果を参照すると、今次の発掘区域を含めて SA630以東の区画内には、北を背にして建物がコ字型に配置され、内部は空地になつていたもののようである。

今回発見した井戸 SE2128はこの空地の北部にある。下部一段だけが残つていた枠板は、長さ1.2mで、それぞれ甲乙丙丁の番付が墨書されている。井戸の周囲には方形に溝がめぐり、さらにその排水を南に導く溝がつくられている。

空地の南部には数個の土壙が重複しており、内部から計四三七点に達する木簡と、各種の木製品などを発見した。そのうち SK2101からは「天平勝宝二年」、SK2102からは「神亀五年」「天平元年」の紀年を持つ木簡が出ている。なお今次の調査の東西両地区とも、大部分が市庭古墳の周濠を埋立てた整地面である。整地層の全面的な発掘は行わなかつたが、東地区では古墳の規模を確かめるため、前方部東南隅と、それをとりまく濠の一部を発掘した。

第19・21次調査　第2次内裏東外郭～東面北門

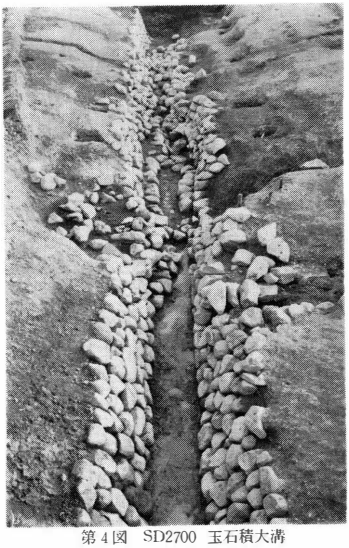
通称一条通りの南側で、第2次内裏東面築地回廊の東側から、宮城の東面北門（山門）にいたる間を発掘した。調査の第一の成果は、内

裏大垣の検出である。築地 SA705 はすでに第13次調査の際、一条通りの北側でその一部を発見し、第2次内裏の外郭をめぐる築地であろうと推定していたが、今回その延長部を検出したことによつて、この推定に誤りのないことがわかつた。その中軸線がちようど、第2次内裏中軸線の東方500尺(基準尺29.5㎝)に当ることは、内裏内郭と同一の計画によつて造営したことを示している。

築地の東22mには南北に走る玉石積の大きな溝 SD2700 がある。これは昭和3・7年に岸熊吉氏が、一条通り北側で発見した溝につらなるもので、水田の畦畔の形から推測すると、さらに南方に長くのびているようである。その幅は2.6m、深さは1.5mであつて、宮城東部における排水溝の系線と見なすのにふさわしい規模を持つている。溝内の堆積は上下二つの砂層に分れ、下層からは「天平元年」「天平二年」の紀年のある木簡が、上層からは「天平勝宝二年」より「天平宝字五年」にまたがる紀年のある木簡がそれぞれ出土した。さらにこれ等の層の上に、溝全体をおおう黒土層が堆積していて、そのなかから「延暦元年」の紀年を持つ木簡と隆平永宝が出土した。

この大溝には東西両側から排水溝の支線が流れこんでいる。そのなかで注意をひくのは、内裏内郭から築地 SA705 をくぐつて大溝に注ぐ暗渠 SD2000 である。その横断面は逆台形を呈していて、側は下部を凝灰岩の切石積とし、その上にさらに大きな玉石を積み足している。

つぎに宮城の東縁付近について述べると、まず東面の大垣は、当初の築地がほとんど削除され、その痕跡らしいものがかすかに残つていただけである。のちに同じ位置に築地 SA2800 が再建されるが、これも南脇門 SB2755 の唐居敷と、瓦を用いた築地下の暗渠の残骸によつて、ようやくその存在を知り得たにすぎない。


第4図　SD2700　玉石積大溝

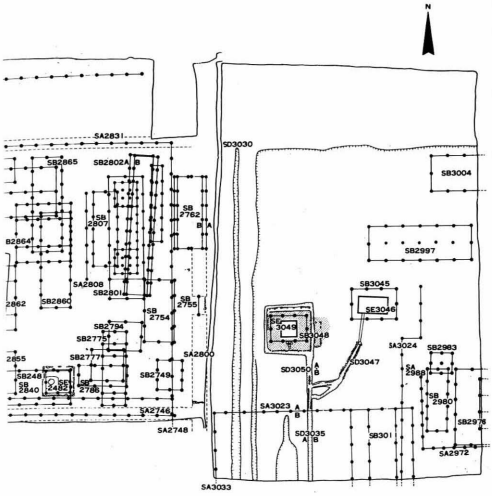
調査の主な目標の一つであつた東面北門にいたつては、推定位置に何等の痕跡をもとどめていなかつた。このあたりは地盤が堅固であつて、南面・西面の諸門のような深い掘込み地固めを必要としないから遺構が簡単に削り去られてしまつたのであろうと考えられる。

北門推定位置の内方は、遺構のない幅12mの空地が東西に長く続きその両側にそつて柵または築地が走つており、この空地は道路であつたと考えられる。この道路と玉石積大溝との交叉点に橋 SX2733 があるから、道路は内裏外郭築地 SA705 にまで達していたはずであるけれども、突当りの築地に明確な門の痕跡は見当らなかつた。

この道路の南側、宮城大垣と玉石積大溝の間は、時期によって柵か築地のいずれかで外周を画した一区画をかたちづくっている。

掘立柱建物は上記の道路の部分をのぞいてほとんど全域から検出された。別表に示すようにそれらは少なくとも5期に分れるが、全体にわたって最も建物の整備した時期はC期である。

井戸は内裏外郭内から1基、玉石積大溝と東面大垣との間の区画内から1基を発見した。前者SE2600が方形であるのに対し、後者SE2842は円形で、縦板を組んで側としている。前者からは木の股を利用した丸彫の人形を発見した。

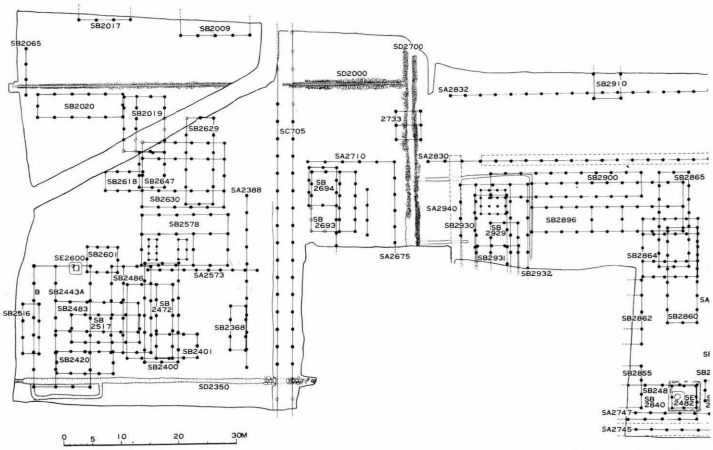


(3)

地区	時期	遺構	柱間	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	備考
			間 間	m	m	
東面北門内側	C	SB 2900	1 0×2	2.70	2.10	
		SB 2929	3以上×2	2.50	2.10	
		SA 2745	11以上	2.50		
	D	SB 2786	3×2	2.80	1.80	
		SB 2860	7×2	2.50	2.60	
		SB 2932	5以上×4	3.00	3.00	東西廂
	E	SB 2755	1	3.0		脇門
		SB 2762A	5×2	2.50	2.50	改築→B
		SB 2775	6×2	2.15	2.10	南北廂
		SB 2841	2×2	2.10	1.90	井戸上屋
		SB 2896	10×2	2.60	4.20	間仕切
		SB 2910	1以上×1	4.50	4.50	
		SB 2931	1以上×3	2.40	2.40	
		SE 2842				直径1.1m
		SA 2746				築地塀跡
		SA 2800				〃
		SA 2831				〃
		SA 2940				〃
	?	SB 2694	3×2	2.10	2.30	
		SB 2749	3×2	1.70	2.10	
		SB 2754	4×2	2.70	2.60	
		SB 2777	2×2	2.80	2.70	

(4)

地区	時期	遺構	柱間	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	備考
			間 間	m	m	
東面北門外側	?	SB 2794	2×2	2.90	2.50	
		SB 2807	6×2	2.10	2.10	
		SB 2864	5×4	1.90	2.40	南北廂
		SA 2747	11以上	2.50		
東面北門外側	A	SB 2976	5×1以上	2.60	2.60	
		SB 2997	6×2	3.00	3.00	
		SB 3004	3以上×2	3.00	3.00	
		SB 3045	3×2	2.55	2.60	泉屋上屋
		SB 3048	3×2	2.10	2.10	井戸上屋
		SE 3046				5.4×3.0m
		SE 3049				方2.8m
		SD 3047				
		SD 3050				
		SD 3029				木簡出土
		SD 3035				〃
		SA 3024	8以上	3.00		
	B	SB 2980	5×2	2.15	1.75	
	C	SB 3011	4以上×2	3.00	2.40	
		SA 2972	5以上	1.9		
	D	SA 3023	10	?		
		SD 3030				



第5図　第19·21·22次(南)調査実測図

第3表　第19·21·22(北)次調査発見遺構　(1)

地区	時期	遺構	柱間	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	備考
			間 間	m	m	
内裏東外郭	A	SB 2443A	7×2	3.00	3.00	
		SB 2440	6×2	3.00	3.00	間仕切?
		SB 2009	1以上×4	?	3.00	
		SA 705				外郭築地
		SD 2000				凝灰岩溝
	B	SD 2350				暗渠?
		SB 2443B	7×3	3.00	3.00	西廂
		SB 2486	5×3	2.40	3.00	西廂
		SB 2629	5×2	2.40	3.00	
		SB 2020	5×2	2.10	3.00	
		SA 2388	10	3.00		
	C	SB 2017	?			
		SB 2065	?			
		SB 2517	5×2	2.40	2.40	
		SB 2601	3×2	1.70	2.20	
		SB 2630	5×4	2.80	2.80	南北廂
	D	SB 2019	5×3	1.90	1.40	西廂
		SB 2472	5×3	2.70	2.55	東廂
		SA 2073	4以上	1.50		
		SE 2600				方1.2m
	?	SB 2368	3×1	2.40	2.70	
		SB 2401	3×2	2.40	2.05	

(2)

地区	時期	遺構	柱間	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	備考
			間 間	m	m	
内裏東外郭	?	SB 2420	4×2	2.50	1.90	
		SB 2483	5×2	3.00	2.25	北廂
		SB 2578	5×3	3.00	2.70	
		SB 2618	3×1	2.15	3.30	
		SA 2573	9	2.10		
東面北門内側	A	SB 2802	11×1	2.20	4.00	改築
		SD 2700				玉石積溝
	B	SB 2693	5×3	2.10	2.30	東廂
		SB 2801	7×2	3.00	3.00	南廂
		SB 2840	4以上×2	3.00	3.00	
		SB 2930	4以上×2	3.00	2.70	
		SA 2675	5以上	2.70		
		SA 2710	5	3.00		
		SA 2748	17以上	2.70		
		SA 2830	24	2.60		
		SA 2832	21以上	2.60		
		SA 2808	5	3.00		
		SX 2733				橋
	C	SB 2855	?×3	2.50	?	
		SB 2862	?×4	2.90	2.70	南北廂
		SB 2865	7×2	2.40	2.50	

第22次調査　東面北・中門外側

宮城の東側で、北門外側と中門外側の南北2個所にわかれて発掘をおこなつた。発掘個所は、主として旧東一坊大路の道路敷に当るが、国道24号線バイパスの建設候補地となつているため、宮城外であるにもかかわらず、緊急に発掘を実施した。

〈北地区〉

東面北門の外側に当り、第21次調査区域の東に接する。発掘区域の西縁では、第21次調査によつて検出した東面大垣築地 SA2800の東ぞいに、幅約4.5mの瑞地と、側溝 SD3030が付属することがわかつた。その東には時期のさかのぼる溝 SD3031が併行して走り、さらにその東には南方にのびる溝の一端とみられる SD3029がある。これらの溝のうちいずれかが、南地区で発見した外堀につらなるのであろう。

東一坊大路の路面は、溝 SD3030から柵列 SA3024のあたりまで、幅約30mの範囲にひろがるバラス敷の平坦面がそれに相当すると考えられる。またこれと直交して、北門推定位置から東方に、幅約11mのバラス敷がのびているので、ここに坊間の路の存在を推定した。

北門推定位置の正面からすこし南にはずれて、東一坊大路の中央に二つの井戸がある。西の SE3049は覆屋を持つ方形の井戸で、周囲に方形のバラス敷と溝をめぐらし、東溝が南に延びて排水溝 SD3050になつている。東の SE3046は長方形でやはり覆屋がある。その湧水は南西隅にとりつけた暗渠の木樋にあふれ出るようになつているから、泉屋と称すべきものである。その排水溝 SD3047は南西に導かれて、西の井戸からくる溝 SD3050に合流する。

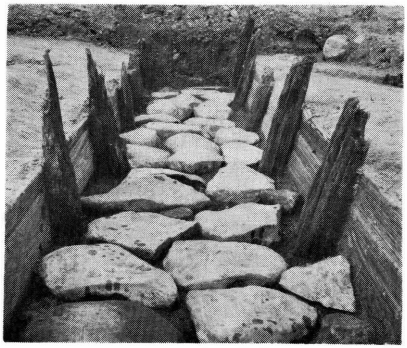
この二つの井戸は、奈良時代の前半期につくられ、いく度かの改修を経ながら長期にわたつて存続している。溝 SD3050の上層から発見した「宝亀元年」の木簡は、これらの井戸の下限を推定する有力な手がかりとなる。

発見した掘立柱建物は、第4表にかかげたように6棟である。そのなかの古いものは東部に偏在しているから、大路の通行に支障を与えなかつたであろうが、のちには SB3011とそれに付属する柵列 SA3023が、大路を横断して設けられるから、東一坊大路は完全に道路としての機能を失つてしまつたにちがいない。

なお、さきに述べた SD3029からは、霊亀二年より天平勝宝八歳にいたる紀年のある木簡とともに、造酒司関係の木簡や墨書土器がでており、付近の遺跡の性格を暗示している。

〈南地区〉

東面中門の外側に当り、東一坊大路と一条南大路が交わる地点と推定されていた区域である。



第6図　SD3109 溝

最初に宮城の東限を画していた施設について述べよう。

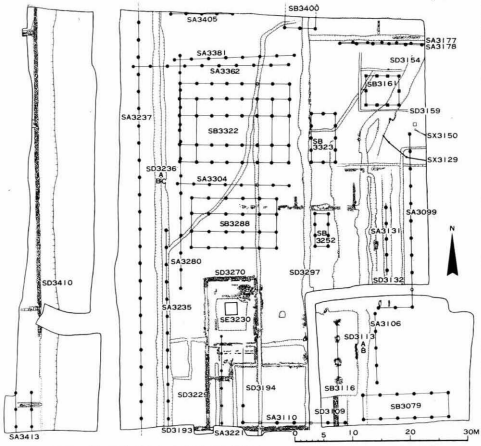
ここでは北地区で不明瞭であつた東面の外堀を確認した。SD3236 A・B・Cがそれである。堀は素堀りで2回の改修がおこなわれている。最古の堀の底から、外堀掘さく以前に宮城を画したらしい柵 SA3235を検出した。外堀の西方にも南北柵 SA3237があるが、SA3235との前後関係はわからない。従来は、この柵のすぐ西側にある畦畔を、東面大垣築地の名残りと考えていたのであるが、その位置に築地らしい遺構は今のところ見当らない。かえつて、従来の大垣推定線の西10mのところに、予想もしなかつた大きな溝 SD3410を発見した。当初の溝は素掘りであるが、のちに地盤の一段高い西側だけに玉石積の護岸を設けている。ただし、南部では玉石積を杭列にかえている。溝内からは「子島作仏所…」の墨書がある須恵器片をはじめ、八世紀末の土器が多量に出土した。

東面中門の遺構も従来の推定位置には発見できなかつた。おそらく右の大きな溝の西側に建てられたのであろうが、今後の調査にまちたい。

次に道路について述べる。東一坊大路の路面は明瞭な痕跡を欠くが一応外堀と、その東方に併行する溝 SD3297にはさまれた幅約23mの範囲と推定した。一条大路は従来の推定位置に、道路の方向と直交していくつもの柵や溝が走つているので、果して道路が存在したのかどうかはなはだ疑わしい。

東一坊大路の中央で中門推定位置の正面からやや南にはずれたところに、井戸 SE3230があり、周囲に玉石敷が方形にめぐつている。また井戸の付近を中心として、大路の上には玉石を使つた小溝が縦横に通つており、それらはすくなくとも3期にわかれる。

北地区と同様この地区においても、大路はやゝ時期の降る2棟の掘立柱建物 SB3322・3288と付属の柵によつて完全に閉塞されている。二つの建物は両側の溝 SD3236とSD3297の中間に正しく位置しているから、両側の溝が存続していた期間



第7図　第22次調査南地区実測図

第4表　第22次調査南地区発見建物

建　物	柱　間	柱間寸法 桁行	柱間寸法 梁行	備　考
	間　間	m	m	
SB 3079	5×1	3.00	4.20	南へのびる？
SB 3116	3	3.00		門？
SB 3161	3×2	1.90	2.40	礎石建物
SB 3252	3×1	1.90	2.30	
SB 3288	5×3	2.90	3.00	南北廂
SB 3322	7×5	2.70	2.70	四面廂・北孫廂
SB 3323	4×2	2.10	2.10	

に造営されたことは疑ない。

東一坊大路の推定範囲より東の区域は。溝・柵・建物等の遺構が錯雑しており、現在発掘結果を整理中で、結論はそれをまちたい。ただその北半部から、懸樋に類した木製の導水施設を発見したこと、南半部で基壇の上に立つ礎石建物 SB3116 を発見したことを付記しておく。

遺物のうち顕著なものとしては、溝 SD3159 内発見の二彩壺破片と SB3116 付近から相当数発見された緑釉埴破片がある。木簡は発掘区域の各所、特に溝内から散発的に発見した。全体として、遺物の品目や形状は宮城内と全く変らないから、上記した宮域外の遺構も、平城宮に付属した施設であると見て誤りないであろう。

第23次調査　北面大垣築地

宮城の北面中門推定位置から東に約100mへだたったところで、北面大垣築地の内外両側を発掘した。

この区域にはもと、北面大垣築地の痕跡と考えられる土塁状の高まりが残っていたのであるが、昭和39年春頃、土地所有者がこれを全面的に削平し付近を整地してしまった。今回の調査は、右の現状変更が遺跡におよぼした影響を調べ、あわせて、第14次調査の際宮城の南縁で確認されたと同様な外堀が、この部分にも存在したかどうかを確めるためにおこなったのである。

発掘の結果、もと土塁状の高まりがあった個所の下層から、北面大垣築地 SA2300 の基礎地固めを発見した。この地固めは地山を掘りこまずにつくられており、現存の幅9.2m、南部が大きく破壊されているため、もとの幅を知ることはできない。築地本体の基部が全く失われているので、その位置を的確につかめなかったが、地固めの北縁から4.5mおいた内方の、幅1.6mほどの部分が特に入念につき固められているので、その部分に築地の本体があったものと推定した。

築地本体を推定した位置の下層からは、築地築成以前の時期に宮城の北辺を画したと考えられる掘立柱柵 SA2330 を発見した。

築地の外方には、調査前に予想していたような外堀がなく、かわりに築地基礎地固めの外側にそって、幅約12.2mにわたる粘土質の整地層があり、その北縁に瓦の堆積が認められた。

築地内方の宮城内に当る区域は、後世にいちじるしく削平されていて、奈良時代の遺構は全く残っていなかった。

冒頭にも記したように、本年度の調査は宮域の四至の確認に重点を置いた。

その結果として、宮域の南側と西側では境界線が比較的安定しているのに対し、東側では境界線がしばしば移動を重ね、しかも宮に関係した建物が境界線をこえて宮城外の大路に進出していたことが判明した。この予想外の事実をどう意味づけるかは今後の課題であるが、同時にこれらの宮域外にはみ出した遺構の保存についても十分な考慮がはらわれなければならない。

表中の時期区分A・B・Cは、同一地区での相対的な序列であって、各地区に共通したものではない。また柱間寸法は概数値を示す。

（横山浩一・工楽善通）